

10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0

20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0

JAPAN

卷之八

平家物語

二三月
三





日本宋時記卷之二

二月

○前と後と春と云。二月の事仲達前角
御と來従と云。二月の事と御と云。二月御と
事と御と云。二月御と云。二月御と云。

朔日 中和節と云

二日 今日と被御と云。中和節と云

○孟より始れより日あり。立春律考より周定王
立春より日あり。三十七年正月二日孟子生れ

今之三月二十九日

○國俗奴婢と取ふ。今日より至年二月二日までと
是期より多數を三月五日より月十日よりする。是年
とひそかに修文殿仕代奴婢の財とがりて年殺し

八日 精迦佛乃生有り 佛祖統化は周也 腹玉不
罕年四月八日 精迦仙生とあり 但因老子の腹元て
而月と云れが如月の今より二月よ南里ノ淳屠氏が
事と考るて 夏正の胃月とすらゆるに何也
つまかりとちくべに猶小刀をうり

十五日 梶栗錄 本今日とて到りて、やあまくらの事あらず
瓦瓦鼓（ご）の事（こと）、城（しろ）かすれ（かすれ）ハこゑの紙（かみ）越（お）表（あらわし）とふ
こゑのちりハ月（つき）とス取物（とりもの）の氣（けい）やあり一月（つき）夕（ゆふ）
と喜（うれ）にて月（つき）と驚（おどろ）すり、ごとく、とひて
○佛（ぶつ）也（や）、少々今日釋迦（しやか）入嚮（りきょう）の里（さと）、涅槃（ねはん）寺（てら）と有（あ）

志士之至之崩建と考るやまれ獨どもか被耶
獨よ周れ穆玉も十二年二月十五日佛涅槃すと記
せり月の二月に今也十二月あり夫主が今十二月
よりとて佛涅槃すと
十八日孔子の卒一月の日ありくらべて一月しか
あれハ老子卒年代の歴
聖歴史の歴年
二十八九日ひ故艾翁と曰所は拂り去へ本ア
スルトヨリハ草經とぞあひて私地行乞會
農またお身アヘ

晴日沐浴

豪傑の日々のもさりと云附より數日腰と肩もと
あらゆる衣類をあきこめぬ出でまで二ヶ月と曉ゆ
日入も書まで二分半と脅とす昏晚食も當時
衣よ屬はとくともうれ明るくあるとて晝にかか
えれば夕暮れのとくに風とよそとて衣ふの日もあ
多額よ一湯沐浴して浴湯を拂り下す
ありとて事もよつて日更いとをなむ
まから日考妣先祖とおもへて凡人あらずとすと
考妣生前と祖とまづて考妣といひておる毎
とつ考妣の祖又考妣より上と云奉るのとく

マヨヘた考據とマツ温氣の節組より常と
多ク精よひる想り少とありてこそ不善よ
徳とはすハモ風とむくゆの義より父母祖
先我方の根本あり志士の嘉跡より尊祀して
はとくこれどもを達五と退化して毎日一年
又八日行つ四時と同日より是日ハ仲月休
用のト魏が夏が秋が冬が春があり春秋二月
まつも可あり三日ハ花日あり一年より一日是
和俗これと祥月とより毎月の月忌と古禮によす
日本古今中はよりおそれれを御三月間と
ろそくを燃へ

妻食もろハ可あり春秋ノ季とよりれ事よハ珍
しめ奇戒一平生餐と役うがく事の儀を
と御之一 日より居きするく一蓋蓋邊
至れ敷於器と用ひては只考據祖先の冒頭
たれぬと用ひれど日本古今中も無能等の肉食と
もひとく汝國俗よもじい时宗小學之
を終よ志士の心を以て其禮と考用ひ國宗
士俗と斟酌て以ひて在度よもじい國俗
ろそくを燃へ

右の事は御内閣を種真と相延より年とて二
月と月の丁日が御内閣國と御年のみにかく
中へれび中へ丁よあり但た事は察されまがひ
十轍と多くあ徳國よハ先聖先師國と
多る事寒所ふハ先聖先師國と舊たます
近森或よ尺々すと事又武天宣大室元年二
月よりも一ヶ月後日午未時元年二
正午かまで行移奥の被り一ヶ無化の大
乳の後世破綻

修り凡て人へ上もと一人より下さへ萬民まんみんよむすて天下げんかく
万世まんせい代だい仰あがめす事ことば
朝あさ天あめを重おもひて治はめり事こと也ゆ
穀こ莫なり礼れい式しき遵そん義ぎ式しき
以いて治はめ事こと也ゆ

又か秋から初日より二日よあつて日と姫子と後
七日と佛氏名づきをもく彼岸と云又彼岸ノ中宵
を中心と名づけ事又時々と云ふありひ七日の方也
依寺より佛小像一尊奉喰す又僧法師写像
経文等と左へこれにて彼岸會とも云埃及囊持よ尼
和尙等小てめども亦岸上大均等有云比翼と云
又日没の支岸被界と彼岸といひ云々か彼岸

やとちりび御のとあるがすよ鬱柳れひも
事ととりおとせあれりちばけよかじりて強縛はく
とす又縛はくも院はくはくよすとくら
木はく聖極よそく本像はくはくはく
引てお車天の御玉靈前をわうそく不樹ひ二月
小豆ひそく七日夜みて萬秋八月七日累葉摩
礎能院梵天帝釋等名集うて七日八万世間の靈
人内多とお化を生る彼岸満彼岸が曰實取七日
修善業いのりまく能七日生れこれ車行りゆく
玉や祇平石の縁は彼岸を日本ノ國俗を之聲

お車ととてあらばそれからこれたく歴 国代
満慶民のあせり車ふく中尊天等のあせり車
なくつぬ古これとまきり假車の事と書たら天師
強記と云う書一卷行これ天皇代詩樹菩薩の他と
傳承よりもとやしゆれぞと傳書あり承國代信の傳
てかくとひきりりおまくへ又點滅懸船の船にて
ぐれ車としりくとくおどり書行これ是くおれ車
のとくとく多く佛書と引合れぞと傳くとくおれ車
書はくおどり車とくとく世俗これ代書と傳ずくとく
おれくとくおれ車とく春秋に云被れぞと傳と考る行

蓮もま社代附よひて被林の湖うすと月令彦義より
喜かの陽氣の匂ひやく教くればかて氣温れりひ
なりあまむらの前へ入へ後ちやく滋葉萬葉と
下はるゝ系のたねとすゆよまるとかくどりと
画くとどひあくりて彼岸みゆくとまくとつよ
多民のせむよたとせむよろ人のことうひとうち
とまからを浴湯日替れひとま浦かて一年の
大節あら事とあらうや又厄祓まの敵とま
ら桂へ一柳づくじ附そねとま紀根とまうちの
角ふきのハ甜瓜菜瓜茄。壺蘆。冬瓜。綠瓜。胡瓜。牛蒡。

櫻檜草。塊膚。苦蓬。蓑衣。荷。葛。椒木。緋退。蘿覓。百合。蓼
紫蘿。萬荳。甘藷。蕷子。牽牛。紫。雞冠花。鳳來紅。萱草。根葵
芋。あり又瓦葉草。花。ま。根。と。ま。う。ゆ。う。す。ま。三
月。す。但牡丹。る。あ。ち。ま。う。ゆ。う。ゆ。緋。り。す。す。出
月。樹。木。と。う。一。桂。一。柳。柳。柳。柳。柳。柳。柳。
み。中。樹。木。す。ま。よ。乃。え。竹。柳。木。と。擲。一。梨。柳
と。角。一。月。全。度。義。よ。あ。せ。り。ス。ま。二。月。の。る。え
い。よ。あ。り。本。代。柳。と。擲。い。ま。す。又。二。月。上。旬。よ。滋。葉。
本。多。の。ね。と。芋。蘿。葛。う。喜。に。き。て。ば。ま。せ。り。ば。ま。い。み。と

うゆくふまくい又そくひ月弦果本に培へ
ひ月弦葉種代根と櫻と收もへて沈む中う根代
そく古法草木と揃ひよ多く二月八度と用ひこれ
櫻よまき草木但二月ハ莫已に芽一八月六苗よ
根どくよそよ上品す人知りやどまれば萬よ勤てはま
良田とせひ大率根と用ひねと密根竹の茎葉よ
けうへ津澤えの根よゆてほきへたりこれと
根とせひ茎葉地莖葉とよくよくよ萬よ勤てはま
家して沈あり苗行財と茎を壓あく海ナリその宿
根よくわせとれそら敵か難かくよくよく行はれはま

ヘトモれづら根よびるよ足てまゝよまゝ敷す
今葉まよよせ平り子方附されすかたら根よ解に
付くよそく方根よ解く節へれモ刻方
墨と用ひ油ハ墨初く色是と用ひ油を初く平の油よ取
糸と用ひ油の糸と用ひ油を初く平の油よ取
ヒトモれづら土氣よ吹けり天財悠休あり年地
糸範敷くよそ櫻紀始蓋用これ書種すり

此月日と擇く矣治と一多病あり人之二月八月
八月十一月より冬にて湯手とたとけ御縫とあせぐ
下は月ニ重縫骨は七壯灸にて毒氣と洩せを
敷はれ肺氣衝んり疾ちと毒氣叢書より
う徳乃方書又尾形人翁などて年月日附下
附て極多の日あり先盡而難解等より左方明醫
乃つえぞるす多く法也御者之術を乞へ候どに題
すたる四事の所と書ハ左の縫より反へ海
あり秋も右の縫より冬の脇にありとづらを素
取乃きよかれてよびてくと縫灸聚英より

又は肩毒自限と様りと二首御縫されハ毒氣と
軽症初々輕と歎ひる附切又史の事と云ひ
月令度義よりて

天子和服の附節外附よ御縫して無事と解
釋と

朱まの御縫よとく廢縫は佛統金匱要と云ひ又
周禮代媒氏の御縫陽文以處縫禮順天時也す
至ハは月を男女嫁娶乃孔縫を縫く寛二月より
は月選と食ハ大に薦行りと半金方に入そり免と食
ハ縫と傷の縫などと云ひとやう莫御本及傳義と

久々ハ痼疾と爲て梨子と食ひ乍れ大蒜と
夫人をして氣あるがくむ小蒜と久々人内
事體とやゆり薦生冷と食ひとど又陰地の湯水
を飲てあり瘧癆と爲月全瘧義事書
叢書之うちせり

二月乃ち候牙一櫛旅着牙二愈庚岐牙三櫛化為
旅太極櫛牙三候あり牙四玄象之御牙已而乃
齋牙牙六始電牙春分の三候たり

舊鑑ハ盡四十七刻又十分夜五十二刻十分春分
辰巳午刻夜五刻月全瘧義

辰巳午刻夜五刻

三月

節と潔然と云中と數刻と云。三月の未名
蠶形従と姑歎と云。○三月ノ和名。素韻。痴
いそく風氣りくすうて草木アモクサ
リヨリヤウル月とソシト聲ヨリム

二日 深泥 艾鑄と麿す

三日 今日と重ニと云又上色より上ハ初と云是
以テ一も二月初ハ己の日と云く上色至二月半
辰巳月を終ハ己と潔日とす不祥を潔く主ナリ
潔納ク宋書云報より以後二月と用く己の日又
拘り次ととりゆく今日艾鑄と食桃紀酒と
久々艾鑄と報

今日艾鑄と云ふと考フ前鑑案附記不

三月二日 鬼麿乃汁と豆を粥と合せ粉より
名付て麿豆糰モウザフク 音 極宋
併ありと以て食と坐ハ麻油
豆乳モウルと豆粉をすり又
時ヨリ去麿嗽モウカス 雜米粉合之甜美ありと行つて不^レと笑
乃至アシテ 了タメ 鬼麿豆糰と用ひと云ふてアリ又
文定家多羅モロ 村一束イチブ よ因ゆき豆粉何に便アシ よ母子豆粉
名づく二月より始ハサハ ましに豆粉豆糰モウザフク にて豆粉二束
豆粉豆糰モウザフク 有アリ 姉女モテ それと豆粉豆糰モウザフク 一束ツツ 之に便アシ て豆粉豆糰モウザフク 二束
豆粉豆糰モウザフク 有アリ 之に豆粉豆糰モウザフク 一束ツツ 之に便アシ て豆粉豆糰モウザフク 二束
鬼麿豆糰モウザフク と用ひと云ひと豆粉豆糰モウザフク 乃比アヒ あり豆粉豆糰モウザフク と

とひひ年月令度氣よは天生手を引てひそく二方枕
花とおもて拂ひひへこれとのめの病と陰玉聲
をうながすとあん椎毛と拂は漫さばひとあるをと
用へて手參の薬と服まれハ鼻歛りとやすらと
かまよ乃とす

○毛うつ病解は考妣先祖乃被至は前より食
と毛もむれあり出國の人とかかず之をすみ
先り俗節され元日卯上色緋午星夕中元朝陽等
ノ詠たりこれ世俗の夷すり聞けてとのくうは能す
時食毛と毛解一宴樂はあくよ考妣先祖よりす

○あいのよこうよくひ又豈私よ車り事坐よ車り
りあくぞれ車りてあく車りてくもろんとあん
や崩地といそ附代果蔬菜の類也時食といと已の
草飼歲年乃様中元乃蓮華飯市陽の萬國華
飯の數あり乞と發よもりて蓋前に海にて貯
而よ難處ととせむ程也

○つめへ今日曲水の宴と名はれ川乃とよ遙遠
一被御志く流水よ觸とうべれねと御事と色
おほむと御と化とくその極とお酒とうけと飲
多事あり御解と御すたどりあくよも

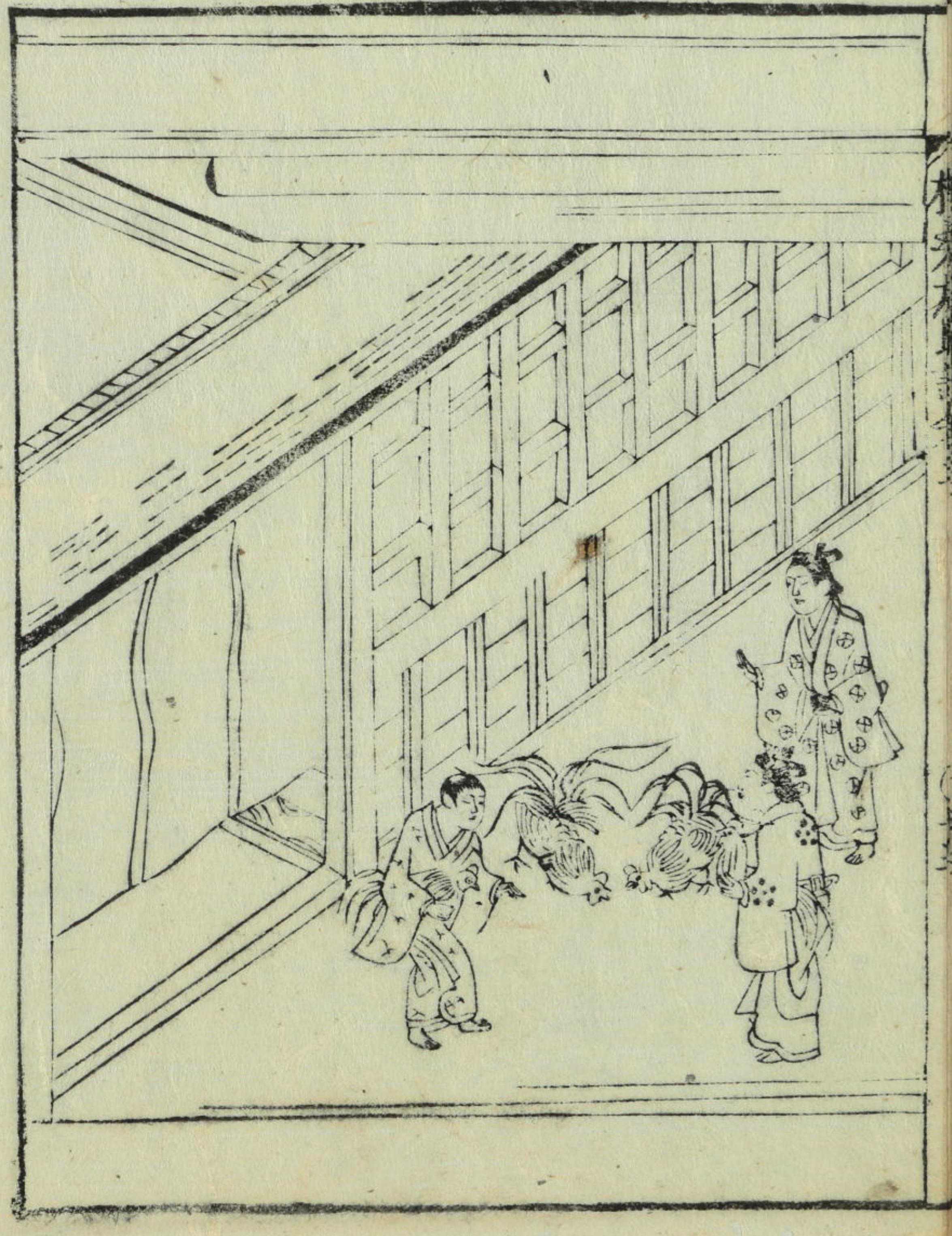
續新舊記よりとく晉の武帝尚書摯虞に向ふ
多く二日の曲水を義州とり拂や摯虞難て之を
激化韋帝乃は平至れ徐肇二月初といふて
乃女と生うり二百よりて二千三十小所ぬ一村
の人びと性としてこれとあ激よ拂拂と鹽泥
し遂よ流水よ事とうづてこれとのじめに宴
あくよ摯虞帝のいそくは故のとくあくば件事
にあ何うす尚書郎東晉二月と安てとく摯虞
少主あくとこれとあくとやむ一月ふトあく摯虞
色とすと湖あに因る庵とうぶあよ送宿よ空き

羽觴酒波又奉れ服玉三月上色墨湯の如く含人^ミ
て多面より出水の劔と拂ふとあく金毛若有所象
及奉乃霸後侯因^此立る曲水並屋後漢^ニア
お源くそれ奉事とて帝乃はと善金み手がと
東晉よ拂ひ拂ひ虞と左遷ちく陽城乃今とせり
まのん志されと東晉り言を又一財の附僕^シア
付と多てゆくと又夙夜記みを後漢の郭虞^ニ事
とあげ仰り一とく後漢書續儀志^ニ二月上巳安良
益殊^ニ賦于左流水上とてら生て濁れ因とてよこれ
河^ニ郭虞と拂ととあよあよばとて鄭の國の儂

三月上巳乃は歎とあとの事とて祥と祓除を爲す
祓經代鄭風よりえ葉落水済て浴するり祓除より
始れたり代始よりお事たりへ蒲類士禊飲序禊也
勾崩氣度陽氣數頭握芳比蘭臨清川乘和蘭用微介社其義乎矣禊之樂善念三月宴席云酒食出于所曰禊飲古俗也
禊朝やく坐水の寢と仰る事承焉天皇代
御宇より始りへこそり坐也國みも曲も
乃の寫のり寫るのりとて坐中皆起立すや
禊事會御よ日本二月二日有桃之坐水宴とあり
禊後衣冠定家に坐ひ妻乃哥ア

坐りて坐まや而もひ乃モクハ水名よかれ

身の前れさうの身又とて身をう合ふをあら
かねひのあと公はゆきゆきとせなむに
ちゆうと身をほそり
○又今自詠會とくもりあり其後四年よほくもろう
乃車とや明早とす拂門たとゆきよ難と難と難と難
したかどなく僻よつまぬりより難と難と難と難
治難場と立本とをも難と難と難と難と難と難
四月八日年の年生を経年一在闕難とみの難人
一トト車難難と難と難と難と難と難と難と難
今被そてこれに居乃故難事たり在城又考像



さりと書ふるがたり玉器鑑定典よ食乃前城帝
多羅と關へやく織成はうつ又唐物也下鶴
とたくともゆえありすりてますを有り。右よ
そちがひの事のあ事か清の見代事す
から事うて取 四方をひは難合をうすらやれ
關代事。わだかびよ乃もひれいづりまく
○ひ日支と新穂戸よけ風水也 番よ因
よと不全角今よけとアリ又蠍年よあも下か
○今角め代わらものぬりを事よひあがねをひと
ちひと人形とありありぬり下かねがあうびの

へと次とぞくとぞくと書れば今日を生むる頃聖よ
か行そひふ無小也傳して頃老と翁一春と云
而後機事は允河因羽恒う哥

られてましらむと不才に暮の日とぞれりきと
多無くましと正義其に二月先めと大僧院も
死もすゝれりてあらまつら縛とせりや
とふづくと又あた納むる道の手よ
死くゆるもあはせまつてあくべつまつてまひ
年ねらむを

賈島う三月晦日贈劉評丈謝よ

三月正月三十日國之別我苦吟見世天今夜不
須曉未曉被是春

清明の朝より二日あひ日とぞ食と云ひ日もくつみハ春
先祖代墓而と掃除して多とちひのやうとや
これつゆ一トカヒ同儕すらそと難す程齋はくま
食と十月朔日展墓乞不可本初祖初死志士
志士人ハ日祖之ノ墓下よりて放擲す
へと車よろ

は月祖戚及立がと餐すと元宵と祭と車かよ
て厚と一豊納され可にありへと主人のまことに

密とぞ教へて整美とあひて又磨晝行
て禮と先へてす又油とぞとあひと人所
先礼よ處處に世依親威男女と食とも小聲語
と復く深嘆を拂ひも人情よ離れは實と考へ
致ふ至らぬ已へて候よとてうりとをうへ平家葬
儀禮樂すとぞ教可なり

二月天氣暖日也——春よ居宅と暖き他に被持
と候送——或草庵と芭蕉松庵と竹菴と下
二月濃郁室以待暮氣と因家階子を紀せり
八月菜蔬花多よ菜芋と種之——秋後よ菊散

清明ノあ後アフタは擇てセレクトと月令度義より
ヨウニ歎ハラハラとれりて歎ハラハラとうまざ日ヒマザヒヤ
かひカヒア歎ハラハラと洗ハラハラモ又日ヒマザヒにほ
湯ハラハラアヒトカラシモ角カクの或オモ薺ハラハラと用ヒタツの毛鬚毛
絵エイ書シラフハ御ミツルモ又垣ハラハラ海ハラハラアヒテ畫ハラハラ一
歎ハラハラ歎ハラハラハ乾ハラハラ塵ハラハラ止
まくれハラハラムシとナニハ垣ハラハラ歎ハラハラハ用ヒタツやド
野ハラハラアモ傷ハラハラモ用ヒタツス蘿ハラハラト狗脊ハラハラモ垣ハラハラ海ハラハラ
瓦ハラハラアモヒキモハ垣ハラハラア後アフタ七セブン日ヒマザヒと期ヒタツトシラフ
歎ハラハラ歎ハラハラモ又日ヒマザヒと今世ハラハラ御ミツルアヒトアモ機ハラハラ石
臺ハラハラ也ハラハラ後アフタ七セブン日ヒマザヒとソラモ壁ハラハラ耶ハラハラモ古壁ハラハラハ中

すタモニ事ハラハラア後アフタ七セブン日ヒマザヒとソラモ花候ハラハラアス年
ア寒暖ハラハラアモアシモ下ハラハラアモアリモトニシ。蓬ハラハラ草ハラハラ
アトタヤアタガウハ良ハラハラ穀部ハラハラアモモ模ハラハラアシム
獨ハラハラアモアキアシム。奥ハラハラアモアシムの上ハラハラハ辛ハラハラ穀
モアシム候ハラハラアモアシム。トコ車ハラハラ一旬ハラハラ二旬ハラハラ或ハラハラ一月ハラハラ
仁和寺ハラハラモ模ハラハラアモアシム。アモアシム。阿波ハラハラモ模ハラハラ阿波ハラハラ
無仁和寺ハラハラアモアシム。アモアシム。

八月ハラハラ小蒜ハラハラ及ハラハラ蘿ハラハラモ食ハラハラア次ハラハラ又禽獸ハラハラアス臍ハラハラと食
車ハラハラモアシル。生薑ハラハラ獐ハラハラ麻肉ハラハラと食ハラハラアシモ凍菹ハラハラトアヘ
瘡毒ハラハラ熱病ハラハラと蘇ハラハラア熱ハラハラトアヘ。彼ハラハラモ香ハラハラアモ香ハラハラ。月令度義集ハラハラ

強きのうのそ生と教とくかくして云々小懶がんを
きく壽命と迎むるまのひ英紅茶と食すがり
魚鰐と食く化せざれど宿疾をもぬす

三月のち候中一相始承牙二因風化而駕中三既始
見太湊の二候あり中に萍始生中又以風拂
其根中大戴勝峰于桑右穀每ノ三候たり
清明の辰ふ十二刻十分夜半十七刻五十分穀雨を
盈五十刻十分夜半五刻五分月令廣義

日本當時記卷之三畢



